

宮古郷土史研究会 会報

No.267

編集 発行 宮古郷土史研究会

kyoudoshiken@gmail.com

△三月定例会レジメ▽

地盛井戸

―消えた一文字の謎をめぐって―

平良 絹代

はじめに

「地盛井戸」は、宮古空港前交差点からシュレーダー通りに入ってほどなく、左手奥に見える旧牛舎の背後の茂みに存在する。明治三十三年に、七原分教場誘致にともない開鑿された。井戸の入口には砂岩の記念碑があるが、井戸開削の発起人として伊良皆金と共に名を刻まれているのが「新城□真」である。名前の一文字が削られているが、この人物は、平良村で二期にわたり村議会議員を務めた「新城真津」であると推測されてきた。しかし、「真津」に縁のある筆者が除籍簿を確認したところ、新城真津の父の名が新城「屋」真であることがわかった。「新城□真」は屋真のことではないのか。屋真の名は、「宮古島水産組合」にも登場する。

「新城□真」の失われた一文字をめぐり、この人物は本当は誰であったか、なぜ一文字が削られているのか。今一度、考察してみたい。

「地盛井戸」について

地盛井戸は西地盛井戸とも呼ばれ、地盛集落内の北西端にある。石段を四十段ほど降りると、直径八メートルほどの水くみ場があり、その中央に直径九十センチの井戸がある。首里の井戸掘り人、新垣三良を雇って掘削しており、宮古では最も早い時期の掘り抜き井戸であるとされる。記念碑の「地モリ井戸新設由来」

	屋真	真津
生・没年	1832～1903	1867～1929
宮古島水産組合(1896)	64歳	29歳
地盛井(1900)	68歳	33歳
特別町村制施行(1908)	没後	41歳 (41歳～48歳村議会議員)

地盛七原両最寄ハ飲料水乏常ニ困難因リ地／盛新城□真七原伊良皆金兩人發起雇大工首里／久場川村新垣三良氏ニ託シ明治三十三年二月三十日工ヲ起／コシタルニ幾日ナラス潔水湧出同年四月二十四日工ヲ終飲料水／不足ナク永代ノ重宝無此上因テ名付テ地盛井戸ト云フ

「屋真」と「真津」

新城屋真は、一八三二(天保三)年生まれ。一八九六(明治二九)年設立の「宮古島水産組合」には、地盛から荷川取松、長間松と共に名を刻む。当時、屋真は六四歳。一九〇〇(明治三三)年に地盛井戸が開鑿されたときには六八歳である。

一方、長男の真津は、一八六七(慶応三)年生まれ。「宮古島水産組合」の年には二九歳、地盛井戸開鑿時は三三歳である。

「新城真津」論の根拠(孫の証言)

新城真津の孫である新城盛雄(明治四十四年生)は、『鏡原小六十年』に「七原分教場設立のかげの力」と題して、こう書き記している。

「...そんな時代に祖父の頭にひらめいてきたのは、後輩たち(子や孫)にだけはこんな苦しい境遇は絶対させてはならない。そのためには学校に部落と人を近づける以外に道はないと固く信じて是が非でも分教場開設に粉骨

砕身する決意を新たにした。...七原に敷地は決定され、名称も七原分教場と決まったが、今度は水問題をどうするかというに移り、当然井戸を掘ることになった。...西地盛に水源があることを証明され、部落民を中心に地域合同の協力によって西地盛井戸のくっさくに成功し遂に分教場の明るい姿はようやく実現される運びとなった。」

また、昭和六一年の在沖地盛郷友会誌『地盛』では、地盛出身者の座談会の中で、宮沢盛次氏が真津の功績について言及しており、土地をめぐり近隣地域との間で起こった二つの裁判を主導したこと、「宮古島水産組合」に名を連ねていること、七原分教場の設立に関わったことなどを挙げている。地盛井戸だけでなく、「宮古島水産組合」も本当は真津であったのか。

この座談会には盛雄も参加していることから、宮沢氏の情報ソースは盛雄であった可能性もあるが、残念ながら確かめるすべはない。

依然濃厚な「真津」説

新城屋真についての記録はないため、井戸開鑿時の年齢を考えても、「□真」はやはり「真津」であったと考えるのが妥当に思える。では、記念碑は誤って「真津」を「屋真」と刻んでしまったのだろうか。大事な記念碑にそのような間違いが起こり得るのか。本来は「真津」であったものを、「屋真」にしなければならぬ何らかの事情があったのか。

手がかりを得るべく、多くの知見や資料を歓迎したい。

地盛井戸碑(該当部分)

劣化が激しく、今では発起人の名前部分の大半が判読不能になっている。

